

看護地域連携センター報告書

令和5年度

目 次

I	はじめに	1
II	令和5年度事業報告	2
	1. なごや看護実践セミナー	2
	1) 訪問先でも慌てない！～訪問看護で遭遇しやすい症状トップ3（痛み、発熱、呼吸困難）のアセスメント～ 搬送する？搬送しない？判断に迷わないためのアセスメント力を身に付けよう！	
	2) もう困らない！せん妄対応のファーストステップ	
	3) 高齢者の頻尿や尿失禁、排尿困難に対するアプローチ —押さえておくべきポイント—	
	4) 心不全を知ろう —地域で心不全患者を支えるために—	
	5) 家族支援とオープンダイアログ	
	6) 臨床倫理の4分割表を使いこなす	
	7) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう(ベーシック)	
	8) デバイス関連感染対策 ～血流感染予防対策・尿路感染予防対策	
	2. 看護研究のすすめ	14
	1) 個別で看護研究	
	2) どうする看護研究	
	(1) 看護研究いろはの「い」	
	(2) 看護研究いろはの「ろ」	
	(3) 看護研究いろはの「は」	
	3) 出張研究セミナー	
	3. なごや看護生涯学習公開講演会	20
	4. 地域連携セミナー	22
	5. 看護研究サポート	25
	6. 昭和生涯学習センター共催講座	27
III	今後の課題	30

名古屋市立大学大学院看護学研究科

名古屋市立大学病院看護部

名古屋市立大学医学部附属東部医療センター看護部

名古屋市立大学医学部附属西部医療センター看護部

名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院看護部

名古屋市立大学医学部附属みらい光生病院看護部

I はじめに

名古屋市立大学看護学部では、令和5年からの学部定員増に伴い、様々な組織改編も進行中であり、あらゆる方面での変化と改革に対応が求められる日々を過ごしています。本センターの運営委員である市大病院の看護部職員も病院組織の拡大にともない激動の日々を過ごしています。このような状況ではありますが、本学の地域への貢献をより強化するために、本年度も地域住民へのセミナーや講演会、臨床で働く看護職を対象にしたなごや看護実践セミナーや看護研究支援等、様々な活動をメンバーで工夫を凝らし行いました。ようやく新型コロナウイルス感染症によるイベント開催制限の解消がなされたこともあり、対面型のイベントを増やし、新型コロナ前のレベルの参加者を見込めるよう努力を重ねました。

本センターでは、対象者の皆様のニーズがどこにあるかを日々議論してきました。次年度には、看護地域連携センターも本格稼働することが決まりました。より活動を強化できる見込みができたため、名市大の5つの附属病院への看護部への現状や研究サポートニーズ調査なども実施しました。これらのニーズに沿ったプログラムを今後考案し、実施していくことが望まれます。

成果としては様々ではありますが、どの活動も委員が少しでも皆様のお役にたてるようにと思いながら取り組んだ活動です。以下に、今年度の活動を総括し、あわせて最後に今後に向けての課題を述べさせていただきます。

II 令和5年度事業報告

1. なごや看護実践セミナー

担当：安東由佳子、小山晶子、峯恵、小塚亜矢、田島英子、石川裕子、山吹美貴

「なごや看護実践セミナー」は、愛知県内の保健医療職者を対象に、より専門性を高め地域住民へのサービス寄与につなげることを目的とした地域貢献事業である。今年度は看護実践セミナー8件を企画し、6件を開催出来た。また、開催方法は、対面4件、ハイブリッド2件であり、大きな問題もなく円滑にセミナーを実施することができた。対面によるセミナーは、十分な感染対策のもとで開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
2月	セミナー実施の承認・検討 テーマおよびセミナー担当者募集開始
3月	テーマ申込み状況の把握、教室予約
5月	全テーマの開催日程、場所決定 チラシ、チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 参加申込方法（メール申込、名古屋市電子申請申込）の検討
6月	チラシ印刷発注
7月	チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計168箇所） 参加者募集開始 看護地域連携センターホームページで告知開始 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討 アンケートの検討 参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表、受講カード、アンケートの決定
8月	受講生に受講カードの送付
9月 ～2月	各セミナー実施 実施前：受講者の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、事務に領収書の依頼セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載
9月 ～2月	・訪問先でも慌てない！～訪問看護で遭遇しやすい症状トップ3（痛み、発熱、呼吸困難）のアセスメント～ 搬送する？搬送しない？判断に迷わないためのアセスメント力を身に付けよう！（9/30） ・もう困らない！せん妄対応のファーストステップ（10/21）

	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の頻尿や尿失禁、排尿困難に対するアプローチ —押さえておくべきポイント— (10/30) ・心不全を知ろう—地域で心不全患者を支えるために— (11/11) ・家族支援とオープンダイアログ (11/11) ・臨床倫理の4分割表を使いこなす (12/2) ・急変させないためのアセスメント能力を高めよう (ベーシック) (12/23) ・デバイス関連感染対策 ~血流感染予防対策・尿路感染予防対策 (2/9)
--	--

2) 事業の実施状況

(1) 訪問先でも慌てない！～訪問看護で遭遇しやすい症状トップ3（痛み、発熱、呼吸困難）のアセスメント～ 搬送する？搬送しない？判断に迷わないためのアセスメント力を身に付けよう！

講 師：石井房世（名古屋市立大学病院 集中ケア認定看護師）
 清水真名美（名古屋市立大学病院 救急看護認定看護師）
 鬼塚真実（名古屋市立大学病院 がん看護専門看護師）
 吉村元輝（みんなのかかりつけ訪問看護ステーション）

日 時：令和5年9月30日（土）14時00分～17時00分

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟 308 講義室、
 Zoom による遠隔ライブセミナー形式

募集人数：50名

参加者：23名

参加費：3,000円

〈内 容〉

セミナーの構成は講義と演習の2部構成とし、講義で学習した内容を演習で活用し、学習効果を高める形式をとった。

講義の内容は、①電話相談時の意識レベルの確認の重要性②痛みの緊急度判断の方法（LQQTSAの活用した sudden onset の確認）③発熱の緊急度判断の方法（敗血症の鑑別を軸とした qSOFA の活用）④呼吸困難の緊急度判断（フィジカルアセスメントの活用）⑤医師への報告方法（SBAR の活用）の5項目とした。

演習は4つの事例を通して①電話相談時の意識レベルの確認ができ、緊急の状態であるか判断できる②LQQTSA に沿って情報収集できる③緊急度のアセスメントができる④SBAR に沿って医師に報告ができる、の順に沿って難易度を段階的にステップアップし、1つの演習に対する学習目標を1～2個とし、受講生が学ぶポイントを明確にした。知識の定着を図るため、①受講生が自分の考えを言語化する②グループワークで自分の考えを他者に伝え、ディスカッションするという方法で演習を行った。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

講義中、対面式で出席した受講生へは質問の有無などを確認できたが、Zoom を活用してオンライン方式で出席した受講生の反応の確認ができなかった。

講義内容①電話相談時の意識レベル確認の重要性について、その理解を確認するための演習では、講義で伝えた内容と回答例に差異があったため、来年度はその差異がなくなるように講義内容と演習の回答例を修正していく。

受講生が、講義内容と関係なく普段の思考で演習の回答を答える場面があったため、演習開始時に講義内容を活用して考えることを強調して伝えていく。



〈アンケート結果〉

当日参加者 22 名のうち、20 名からアンケートの回答があった（回収率 90.9%）。セミナー参加動機は、「自分の看護のレベル・アップ」15 名（75.0%）、「新しい知識を得る」9 名（45.0%）、「興味・関心があった」6 名（30.0%）であった。セミナーの内容は「わかりやすかった」17 名（85.0%）、「どちらかといえばわかりやすかった」2 名（10.0%）、「どちらかといえば難しかった」1 名（5.0%）と回答した。

(2) もう困らない！ せん妄対応のファーストステップ

講 師：門井真衣（東部医療センター 老人看護専門看護師）
日 時：令和 5 年 10 月 21 日（土）13 時 00 分～16 時 00 分
場 所：Zoom による遠隔ライブセミナー形式
募集人数：15 名
申 込 者：1 名
参 加 費：3,000 円
最少催行人数に達しなかったため、今年度は開催できなかった。

(3) 高齢者の頻尿や尿失禁、排尿困難に対するアプローチ —押さえておくべきポイント—

講 師：窪田泰江（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）
日 時：令和 5 年 10 月 30 日（月）10 時 00 分～12 時 00 分
場 所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室
募集人数：20 名
参 加 者：9 名
参 加 費：2,000 円



〈内 容〉

・頻尿・尿失禁・排尿困難を来す代表的な疾患として、1：過活動膀胱 2：腹圧性尿失禁 3：骨盤臓器脱 4：前立腺肥大症 について、症状、診断方法、治療方法などについて、実際にあった症例を出しながら、参加者にも考えてもらう時間を設けつつ、概説した。

・排尿支援器具について産学官連携で私たちが行った開発例を挙げながら紹介した。立位・座位で男性が使用できる排尿支援器具（ミスターユリナー）、夜間寝ている間や寝たきりの方の介護時にも使用できる器具（ダンディユリナー）の2種類を実物に触れてもらうことで、使用感などイメージしやすくした。

講演後には、普段から看護の中で疑問に思っていることや迷っている事などを質問してもらい、それらに回答した。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

在宅で看護に関わる方や総合病院の勤務者など現在の職場は様々であったが、高齢者の排尿管理については悩むことが多く、カテーテル抜去後の管理方法など多くの質問があった。泌尿器科専門医がいない他科の病棟でカテーテル抜去した後のドクターの指示に無駄なものがあったり、看護職者の負担を増やす業務があることもわかったので、今回の講演をきっかけにより効率のよい看護・排尿管理について、現場で再考する機会になれば良いと考える。

アンケートでは基本的にわかりやすかったとの声が多かったが、事前に参加者からこういうことが聞きたい・・・などの要望を聞いておけたら、講演する時の参考になるし、より良かったかな・・・と思われた。

〈アンケート結果〉

参加者9名のうち、9名からアンケートの回答があった（回収率100.0%）。セミナー参加動機は、「自分の看護のレベル・アップ」7名（77.8%）「興味・関心があった」5名（55.6%）「新しい知識を得る」4名（44.4%）であった。また、セミナーの内容は9名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・メモが取りやすいペースでよかったです。説明もわかりやすかったです。TURPがもう古いと聞いてびっくりしました
- ・病棟勤務のため、高齢者の方も多く、失禁や頻尿等、排尿障害をもつ方も多い。とても勉強になりました。

(4) 「心不全を知ろうー地域で心不全患者を支えるためにー

講 師：川瀬麻友香（名古屋市立大学病院 慢性心不全認定看護師）

日 時：令和5年11月11日（土）9時00分～12時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室

募集人数：20名

参加者：9名

参加費：3,000円

〈内 容〉

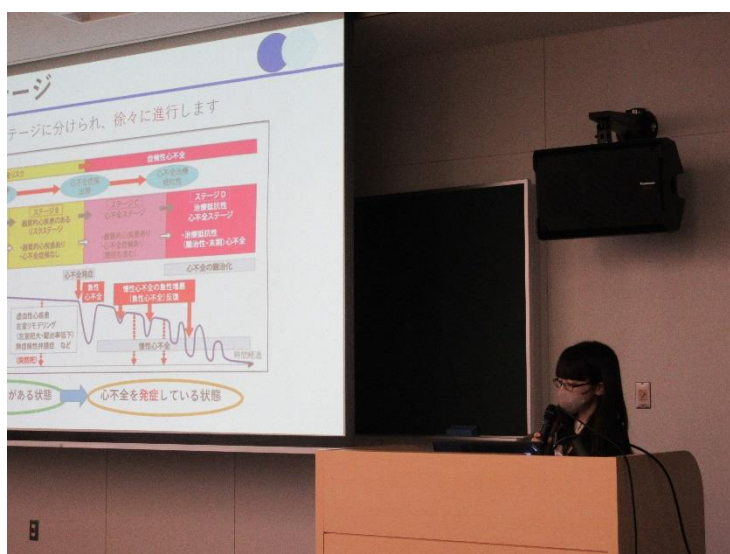
講義内容の構成は、①心不全の概要と病態、②心不全の治療、③心不全の療養指導の3項目とした。

心不全の治療や療養指導について理解しやすいように、①心不全の概要と病態では心不全の症状に焦点を置いて心不全の病態について説明を行うとともに、心不全の定義や分類についても説明を行った。その内容をもとに②心不全の治療は、日本循環器学会・日本心不全学会のガイドラインをベースとして現在の日本で行われている標準的治療(主に薬物療法)について説明を行った。①②に関しては聴講を主体とする講義形式で実施した。③心不全の療養指導では実際の実践現場での場面を想起しやすいように模擬事例を提示して、心不全の療養指導や模擬事例の評価について簡単な質問を手上げ形式で問いかけながら、講義を行った。療養指導の内容については、現在当院でも使用し臨床現場でも使用されていることの多い日本心不全学会「心不全手帳(第3版)」の内容を主体として行い、心不全手帳の内容の解説や活用方法について講義を行った。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

今回は聴講を主体として講義を行ったため、講義中は配布資料を見ながら時折メモを取っている様子が見受けられた。講義の最後に質問の時間を設け、右心不全に関する質問が1件あった。また、講義終了後に実際の実践現場の患者との関わりに関する困りごとについて1件相談を受けた。

今回申し込み段階では遠隔での開催を検討していたが、これまでZOOMでのセミナーを主体的に実施した経験がない等を理由に対面形式へ変更した。参加者のアンケートでは「リモート開催でも良かった」との意見もあり、聴講を主体とする場合は遠隔、ZOOMを使用したリモート形式での開催を今後は検討していきたいと考える。また、今回主に参加者は病院ではなく訪問看護師の方など地域の方が多く、心不全は高齢患者が多いことも背景にあることが、地域での心不全への関心が高まりに影響していると考えられる。今回の療養指導以外にも地域の医療者のニーズに合わせたセミナー内容を検討していきたい。



〈アンケート結果〉

参加者 9 名の全員からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったのは「新しい知識を得る」7 名（77.8%）であった。また、セミナーの内容は 8 名が「わかりやすかった」と回答し、1 名が「どちらかといえばわかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 仕事に活用できる内容が多くて良かった。
- ・ 退院指導に役立つ情報がたくさんありました。
- ・ 私の職場にも高齢の心不全患者が多いですが、関わり方や指導など活かせる内容が多くて勉強になった。

(5) 家族支援とオープンダイアログ

講 師：門間晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

加藤まり（名古屋市立大学大学院看護学研究科博士課程後期）

日 時：令和 5 年 11 月 11 日（土）13 時 00 分～16 時 30 分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室

募集人数：10 名

参加者：6 名

参加費：4,000 円

〈内 容〉

講義と演習を適宜織り交ぜ、要所要所で参加者からの疑問等を確認しながら進めた。

1) オープンダイアログ（OD）とは、理念と考え方、対話への姿勢

フィンランドから導入された OD の発祥・実際、7 つの原則、12 の基本要素、日本での広がりなどについて、フィンランドでの研修ツアーの様子を含めて話題提供した。

演習：リスニング・ワーク（聴く・伝えるの演習）

2) 「聴く」「応答する」ための工夫：演習

(1) 「聴く」と「話す」を分ける体験：対話の可能性を広げるリフレクティング

ファシリテーターもともに参加しながら演習を行った。OD の基本である「聴く」「応答する」を同時に一人の人が行うことは難しい。人や時間を分けて「聴く」と「応答する」の体験、および対話の可能性を広げるために OD では必須として用いられる「リフレクティング」を体験した。またその意義について解説した。

3) OD のイメージアップ

2 つの演習に時間をとることができたが、3 つめの演習は時間的に難しかった。

実際の OD の場面がどのように始まり、どんなマナーの説明が必要で、リフレクティングがどのように始まるのかについて、イメージを伝えた。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

終了後アンケート結果によると、ある程度分かりやすいと感じていただけ、今後の役に立てていただける内容を提供できたと考える。

〈アンケート結果〉

参加者 6 名からアンケートの回答があった（回収率 100%）。セミナー参加動機で最も多かったのは「興味・関心があった」4 名（66.7%）であった。また、セミナーの内容は 6 名全員が「わかりやすかった」と回答した。



(6) 臨床倫理の 4 分割表を使いこなす

講師：澤田美和（名古屋市立大学大学院看護学研究科・助教）

日時：令和 5 年 12 月 2 日（土）10 時 00 分～15 時 00 分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 402 講義室、
Zoom による遠隔ライブセミナー形式

募集人数：1部のみ10名、1部2部10名
参加者：1部のみ3名、1部2部3名
参加費：1部のみ2,000円、1部2部4,000円



〈内 容〉

第1部の講義内容は、Jonsenの臨床倫理の4分割表（第5版）に基づき、医学的適応・患者の意向・QOL・周囲の状況で示されている28項目に沿って、考え方のポイントを解説した。

第2部では、臨床において誰もが経験すると思われる架空の事例を提示し、臨床倫理の4分割表を用いて1事例を2時間かけてじっくり議論した。まず、参加者の心理的安全性を担保し、講師がファシリテーター・書記・解説の3役を担いながら議論を進めた。議論で出た意見をパワーポイントスライドに打ち込み、タイムリーにスライドに映し出しながら進行をした。また、研修終了後にスライドデータをメールで添付することを事前に伝え、議論に集中できるよう配慮した。

臨床倫理や看護倫理に関する書籍を手にとって見られるよう、研修室内に設置もした。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

参加者はそれぞれが自身や所属する組織の中での課題を認識して、どのように取り組んでいこうかヒントを得るために参加されていたことが分かった。このため、講義開始時に所属する部署・領域や倫理的活動の取り組みの段階を把握するだけでなく、事前に参加動機を尋ねておくことで参加者のニーズを的確に捉え、講義内容に反映させたいと考える。

〈アンケート結果〉

参加者 6 名のうち、5 名からアンケートの回答があった（回収率 83.3%）。セミナー参加動機で最も多かったのは「自分の看護のレベル・アップ」4 名（80.0%）であった。また、セミナーの内容は「わかりやすかった」4 名（80.0%）、「どちらかといえばわかりやすかった」1 名（20.0%）と回答した。

(7) 急変させないためのアセスメント能力を高めよう（ベーシック）

講 師：加藤紀子、寺澤涼子、稲尾景子

（名古屋市立大学病院 救急看護・集中ケア認定看護師）

日 時：令和 5 年 12 月 23 日（土）9 時 30 分～14 時 30 分

場 所：名古屋市立大学西棟 シミュレーションセンター、講義室 B

募集人数：16 名

参加者：10 名

参加費：4,000 円



〈内 容〉

このセミナーは、受講生が患者の急変前徴候に気づき、適切な処置を行い、医師などに報告することで、患者が防ぎえた心停止・防ぎ得た後遺障害に至らないように対応できる能力を身につけることを目的としている。患者急変対応コース for Nurse ガイドブ

ックによれば、「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義され、心停止の6～8時間前には何らかの徴候が出ていると言われている。私たち看護師がその徴候を見逃さないためには、患者の変化に気づき、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が求められる。

急変前徴候に気付くかは観察者である看護師の予測範囲によって異なるため、看護師は常日頃から急変に備えて患者を観察、評価する能力を向上させることが必要である。このセミナーでは看護師が系統的に観察できるよう迅速評価、一次評価について学習する内容となっている。迅速評価とは、「最初に出会った数秒間で、呼吸、循環、意識・外見を五感のみを使って、アセスメントする」ことで、患者に「死に結び付く可能性のある危険な徴候」があるか判断することである。アセスメントの結果、心肺停止状態と判断した場合はBLSを実施し、心肺停止状態ではないが、危険な徴候がある場合は、応援要請をしながら、詳しく患者の状態を把握するために一次評価を実施する。一次評価では、簡単な器具（血圧計、生体情報モニタ、聴診器、ペンライト、体温計）を用いて視診、触診、聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表・体温」に問題ないか素早く観察を行う。そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。このような内容を今後臨床場面で実践できるようなセミナーの構成とした。

セミナーの構成としては、講義のあと、講義内容を思い出すための演習、実際に動画を視聴しながら、迅速評価・一次評価を実践する演習で段階を経て知識を習得できるようにした。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

病院勤務だけでなく在宅看護師が多かったが、それぞれの臨床現場での行動や観察に落とし込んでディスカッションできていた。講義だけでなく、アウトプットの演習時間を長めにとることで知識の定着を図ることができた。グループディスカッションでは、

それぞれ話し合った内容を発言することができていた。またタイムリーに疑問解決をしながら進行し、急変前徴候の観察ポイントを学び現場で活用したいという受講生の反応を得ることができた。

〈アンケート結果〉

参加者 10 名のうち、10 名からアンケートの回答があった（回収率 100.0%）。セミナー参加動機は「自分の看護のレベル・アップ」5 名（100.0%）であった。また、セミナーの内容は 10 名全員が「わかりやすかった」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・最初の講義から演習に移行となっており、得た知識をアウトプットすることができてよかった。演習の時間、自分で考えた上で色々な意見を聞くことができたのもよかった。
- ・症例があったのは理解を深めやすく、「ペアで検討」から「グループで検討」の流れは自分の意見も言いやすくすごく楽しみながら学びました。

(8) デバイス関連感染対策 ～血流感染予防対策・尿路感染予防対策

講師：伊藤真早代（西部医療センター 感染管理認定看護師）

日時：令和 6 年 2 月 9 日（金）19 時 00 分～20 時 30 分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室

募集人数：10 名

申込者：2 名

参加費：2,000 円

最少催行人数に達しなかったため、今年度は開催できなかった。

3) 課題

今年度は、8 件のセミナーを企画し、6 件のセミナーを開催出来た。開催方法は、対面 4 件、ハイブリッド 2 件であった。今年度の全セミナーの参加者数は 62 名であり、ここ数年と比較して、参加者数が大幅に増加した。新型コロナウイルスによる様々な制限が緩和されたことに伴い、看護職が自由に活動できるようになったことが参加者数の増加に繋がったと考える。さらに、各セミナーで訪問看護師の皆様の参加が増えており、セミナーのチラシ配送先を訪問看護ステーションにも郵送する等、広報の範囲を拡大したことも効果的であったと考えられる。各セミナーのテーマは、看護職の学習ニーズに合致しており、かつ丁寧でわかりやすい内容であったため、いずれのセミナーも高い評価が得られた。一方で、今年度は最少催行人数を設けたため、申込者が 3 名に満たなかった 2 件のセミナーは残念ながら中止となった。今後、申込者数が少なかった原因を精査していく必要がある。

次年度については、引き続き、関心の高いテーマ設定、広報の対象範囲の検討、広報の強化などを通して、多くの看護職が参加でき、満足してもらえるセミナーの開催を目指していきたい。

2. 看護研究のすすめ

担当：井上高博、江啓発、宮内義明

本事業は、(1) 個別で看護研究、(2) どうする看護研究、(3) 出張研究セミナーの3つの活動から構成され、主に看護職者の研究活動を推進する目的にて開催している。研究する面白さを発見し、研究の興味を高めることで、看護研究を目指す人材の育成に寄与することを期待する事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
10月	次年度開催時期、方法、内容の検討
11月	次年度開催案の検討
12月	次年度開催案、チラシ案の検討
1月	次年度チラシ案の検討
2月	次年度チラシ案、担当者、開催時期の検討
3月	次年度チラシ案、タイトルの決定 参加申込方法（メール申込、FAX申込）の検討
4月	チラシ印刷発注 チラシ、チラシ配布先、配布枚数、印刷枚数の決定 場所決定、教室予約 チラシ発送（病院、名古屋市保健センター、老人保健施設及び精神保健福祉センター、愛知県看護協会など合計168箇所） 看護実践研究センターホームページで告知開始 参加者募集開始
5月	どうする看護研究 申込者へ返信
6月	参加受付対応およびセミナー当日の役割分担表の検討
7月	受講カード、アンケート、業務マニュアルの決定 個別で看護研究：事務に領収書の依頼
8月	個別で看護研究：申込者へ時間と担当教員のお知らせメール配信
7月 ～2月	各セミナー実施 実施前：受講者の決定、受講者リスト作成、参加申込状況の報告、講師へ連絡、セミナー当日の委員の業務内容概要説明、配布資料印刷 実施後：アンケート集計、看護学部ホームページへ開催報告掲載 【個別で看護研究（個別相談）】 7月25日（火）、9月26日（火）、10月10日（火）、11月14日（火）、12月12日（火）、1月30日（火）、2月13日（火）各9:00～16:00 【どうする看護研究】

	<ul style="list-style-type: none"> ・看護研究いろはの「い」 (9/29) ・看護研究いろはの「ろ」 (10/21) ・看護研究いろはの「は」 (11/14) <p>【出張研究セミナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・申込時に対応
--	--

2) 事業の実施状況

【個別で看護研究（個別相談）】

- ・実施日は、7月25日、9月26日、10月10日、11月14日、12月12日、1月30日、2月13日の合計7日間の9～16時で事前予約（午前中）および当日受付（午後14時40分～16時10分）を予定した。事前に各委員へ相談対応ができる時間帯をメール等で尋ね、対応した。結果、9月26日のみ予約と当日受付があったものの、他日には予約ならびに当日受付者はいなかった。

〈アンケート結果〉

9月26日参加者4名からアンケートの回答があった（回収率100%）。研究サポートの概要は「質的研究の分析方法について」（3名）、「質的研究の具体的な進め方について」であった。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・何が分かっていないのかさえ明確になっていないまま、相談させて頂いたのですが、丁寧いきき、わかりやすくご回答頂き、ありがとうございました。
- ・分析の手法、具体的な方法、フォーマットなどのご提案で大変参考になった。
- ・わかりにくい部分については例を提示してくださり、ていねいに説明してくださり、大変わかりやすかったです。

【どうする看護研究】

(1) 看護研究いろはの「い」

講師：安東由佳子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）

日時：令和5年9月29日（金）10時～15時

場所：名古屋市立大学 看護学部棟 308 講義室

募集人数：10名

申込者：1名

参加費：4,000円

最少催行人数に達しなかったため、今年度は開催できなかった。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講師：宮内義明（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

日時：令和5年10月21日（土）10時00分～16時00分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 401 情報処理教室

募集人数：9名

参加者：3名

参加費：5,000円



〈内容〉

10月21日（土）午前、午後で合計5時間の『看護研究いろはの「ろ』』を開講し、「量的研究の基礎」をテーマに講習を行った。受講者は3名であった。量的研究とはどのようなものであるかを知り、量的研究を行うために必要な基礎知識を学習し、量的研究でのデータ分析に必要な統計学の基礎と統計解析を理解し、活用するための方法を学ぶことを目的に講習を行った。基礎とは言え、馴染みのない方が多い数学的な内容であるため、パソコンを用いた統計解析の演習を取り入れ、学びやすいように工夫した。

講習の概要は以下の通りである。

1) 研究デザインの分類と量的研究 10:00～12:00

まず、研究デザインにおける量的研究について概説し、次に、研究に当たって重要な論理的推論について概説した。さらに、量的研究の両翼となる観察研究と実験研究について詳説し、実験研究で問題となるバイアスについては事例を通して理解を深めた。

2) 統計学の基礎と基本的な分析方法 13:00～15:00

データの代表値、基本的な統計量の説明から始め、正規分布、母集団と標本、信頼区間、仮説検定、帰無仮説、p値、有意水準、検出力、第一種と第二種の過誤、自由度、二項分布について詳説した。次に、t検定、符号検定、U検定、 χ^2 検定

といった検定方法について、考え方から計算方法まで詳細に説明した。

3) ソフトウェアを用いた統計解析の演習 15:00~16:00

統計解析に使えるソフトウェア並びに Web サイトを紹介した。次に、 χ^2 検定を用いる例題について、Excel、SPSS、EZR、Web サイト (js-STAR) を用いて解析の演習を行った。特に、Excel については χ^2 検定を順次行うシートを作成し、理論通りに計算を行うことで χ^2 検定が行えること、統計解析専用ソフトウェアと差異の無い結果が得られることの確認をした。

〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

昨年同様、受講にあたり Excel 使用経験を条件としたため、Excel の操作でつまづく受講生は少なく、後半の演習をスムーズに進めることができた。一方で、数学的な内容の説明では、一つ一つ理解の程度を確認しながら進め、理解が進まない部分は説明を繰り返したり、説明の表現を変えたりするなどが必要であった。しかし、アンケート結果から参加者の内 2 名は「どちらかといえば難しかった」と回答しているため、その効果は不十分であったと思われる。一方、今後にはかすことができるかを問う設問では「そう思う」と回答していることから、現在の基礎的な内容が具体的な研究でも大切なものであることは理解されたと思われる。次年度は、基礎的な内容に加えて、具体的な研究での活用へとつなげて行けるように、より理解しやすい説明事例を活用した講習にしていきたいと考える。

〈アンケート結果〉

参加者 3 名からアンケートの回答があった (回収率 100%)。セミナーの内容わかりやすかったかは、「どちらかといえば難しかった」2 名 (66.7%)、「わかりやすかった」1 名 (33.3%) であった。また、セミナーの内容は今後にはかすことができるものかは、「どちらかといえばそう思う」2 名 (66.7%)、「そう思う」1 名 (33.3%) と回答した。

(3) 看護研究いろはの「は」

講師：大橋麗子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授)

日時：令和 5 年 11 月 14 日 (火) 10 時 00 分~15 時 00 分

場所：名古屋市立大学看護学部棟 301 講義室、

Zoom による遠隔ライブセミナー形式

募集人数：10 名

参加者：6 名

参加費：4,000 円

〈内 容〉

1) 講義内容項目

- (1) 質的研究とは
- (2) 質的研究のプロセス
- (3) アイディアからリサーチクエスチョンへ
- (4) 研究方法を考える

- (5) データ収集
- (6) データ分析
- (7) コード化、カテゴリ化を体験してみよう！（演習）
- (8) 分析結果の解釈
- (9) 質的研究の「質」を確保するために

2) 講義概要

研究計画、実施、発表の実際行う順序に沿って、講義を構成した。

まずは、質的研究にはどのような特徴があるのか、どのようなリサーチクエスチョンに適しているのか、量的研究との違いはなにかについて説明を行った。質的研究の方法論については、前段階である日常の実践での気づきをどのようにリサーチクエスチョンに昇華させるのかについても説明を行った。研究方法については、実際の研究論文を示しながら、各研究方法の特徴や留意点、難易度を講義し、特に初学者が取り組みやすい研究方法については具体的に紹介した。データ収集方法については、基礎的事項をおさえながら、インタビューによるデータ収集方法について具体例を紹介し、実際のデータ収集における注意点などを講義した。データ分析については、コード化、カテゴリ化について説明後、実際のデータを用いて演習を行い、参加者にコード化、カテゴリ化を体験していただいた。演習については、講師が行ったコード化、カテゴリ化、図解化、ストーリーラインの例を示した。最後に、質的研究の「質」を確保するための視点と方法について講義を行った。

講義とあわせて、看護研究サポート、個別で研究サポート、出張研究セミナーの案内も行い、どのタイミングでどのような人が利用すると効果的かについても説明した。



〈今回のセミナーにおける受講者の反応・考察〉

今回初めて遠隔 (Zoom) での参加を設定したところ、対面 2 名、遠隔 4 名となった。遠隔のうち 1 名は遠方 (山陰地方) からの参加であり、遠隔でなければ参加がなかったと予測できる。今後も遠隔での開催を行うことで、県外からの参加を見込める可能性がある。ただし、遠隔よりも対面での参加者から活発な質問があり、対面で行う意義も感

じられた。

参加者の条件としては、研究経験が全くない方、現在研究を進行中の方、施設内で研究支援を行う立場にある方など様々であった。アンケート結果からは、「わかりやすかった」「今後の活動に活かせる」との評価を得ており、参加者のニーズにあった講演を実施できたと考える。

〈アンケート結果〉

参加者 6 名のうち、4 名からアンケートの回答があった（回収率 66.7%）。セミナーの内容は 4 名全員が「わかりやすかった」、「今後にいかすことができる」と回答した。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・講師の先生の研究資料を例に出してもらい、とてもわかりやすかったです。
- ・先生が行った研究論文を示していただいたことで、具体的に研究手法をイメージすることができ、理解が深まった。
- ・看護研究初心者ですが、質的研究の進め方に関する講義や演習を通して質的研究への理解を深めることが出来ました。

【出張研究セミナー】

- ・本活動は申込制であったが、申込された医療機関ならびに事業所等はなかったため、活動することはなかった。

3) 課 題

今年度は、個別で看護研究（個別相談）2 件（4 名）、どうする看護研究（看護研究のいろは）にて量的研究 3 名、質的研究 6 名（うち 4 名は ZOOM による遠隔ライブセミナー形式）、出張研究セミナーは開催しなかった。

個別相談ならびに看護研究のいろはの参加（受講）者は少なかつたものの、参加者からのアンケート結果より、有意義な活動内容であったと示唆される。

今年度からの新事業である看護研究のすすめではあつたものの、本活動内容の実績から、各活動内容を再考する必要がある。そこで次年度は、看護研究推進センターの教授が着任することを考慮して、大幅な変更は控え、個別で看護研究については、実施を 2 日間とし、受講料は無料で行うこととする。

どうする看護研究（看護研究のいろは）、出張研究セミナーは募集を継続する方向となった。

3. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：宮内義明、鏡裕行、峯恵、山吹美貴

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に対する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々々の医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。また、本年度はなごや看護学会との共催として、下記の通り準備を進めた。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
5月	テーマ・講師について検討
7月	講師・テーマの決定 会場予約
9月	チラシ（案）の検討 チラシ送付先・印刷枚数の検討
10月	アンケート内容の確認 印刷発注（1,200部） 事務へプレスリリース依頼 プレスリリース（報道関係） 看護地域連携センターホームページ告知開始
11月	チラシ納品、チラシ発送 講師への最終確認書類の発送
12月	当日役割分担の検討
1月	参加申し込み状況、準備状況の確認
2月	開催方法変更決定、講師、参加者への変更通知 配布資料到着、公開講演会実施 実施報告
3月	アンケート集計結果報告

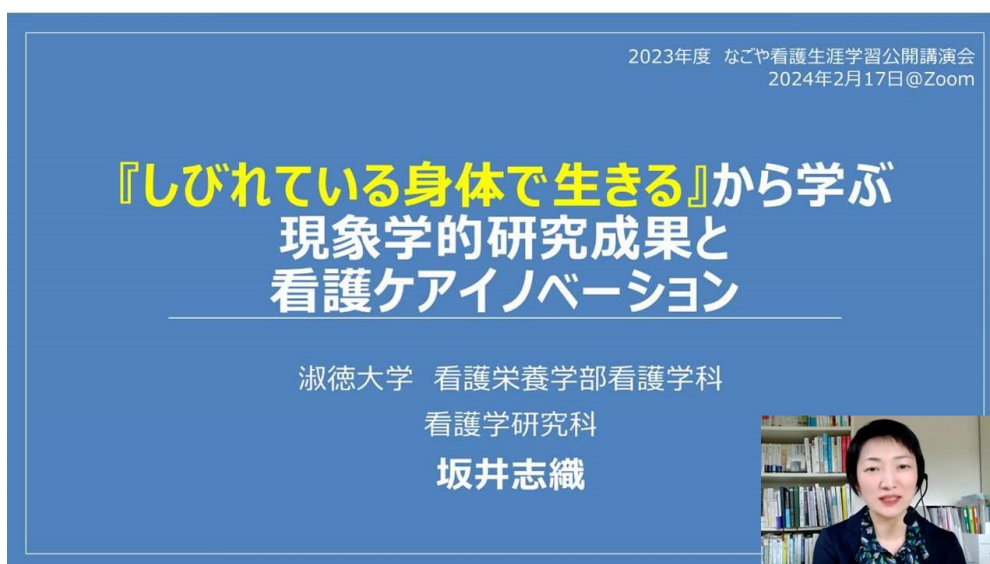
2) 事業の実施内容

テーマ：『しびれている身体で生きる』から学ぶ
現象学的研究成果と看護ケアイノベーション
講師：坂井志織氏（淑徳大学看護栄養学部 准教授）
日時：令和6年2月17日（土）13:30～15:00
場所：Zoomによる遠隔ライブセミナー
参加費：なごや看護学会会員 500円 非会員 1,000円
参加者：47名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

今年度は、臨床看護師として“しびれ”を苦しめられた患者とのかかわりを契機に、しびれについての看護研究に取り組むため研究の道に進み、現象学的研究の知見を看護実践つなげる取り組みをされている淑徳大学看護栄養学部准教授の坂井志織氏をお招きし、『しびれている身体で生きる』から学ぶ現象学的研究成果と看護ケアイノベーション」というテーマでご講演いただいた。

当初は5年ぶりに対面での講演会を行うべく準備を進めてきたが、年明けからの新型コロナウイルス感染第10波の蔓延とインフルエンザの同時流行を受けて、開催日の2週間前に対面での講演会は断念し、ZoomによるWeb開催のみで実施することになった。開催方法の変更という形になったが、講師をお願いした坂井先生がZoomでの講演に慣れておられたこともあり、“しびれ”や高次脳機能障害、慢性疾患など一見すると病いがわかりづらい・伝わりづらい患者の経験を、記述的に示す現象学的アプローチにより理解し、看護ケアにつなげていく取り組みについて大変分かりやすくご講演いただき、参加者から好評をいただく講演会となった。



2023年度 なごや看護生涯学習公開講演会
2024年2月17日@Zoom

『しびれている身体で生きる』から学ぶ
現象学的研究成果と
看護ケアイノベーション

淑徳大学 看護栄養学部看護学科
看護学研究科
坂井志織

The slide features a blue background with white and yellow text. In the top right corner, the event details are listed. The main title is centered in large, bold characters. Below the title, the speaker's affiliation and name are provided. A small video inset in the bottom right corner shows the speaker, Shiori Sakai, in a professional setting with bookshelves in the background.

3) 参加者アンケート結果

参加者47名のうち、22名からアンケートの回答があった(回収率47%)。参加者は看護師(55%)と看護系大学教員(41%)がほとんどであったが、医師の参加もあった。講演内容について、「分かりやすかった」もしくは「どちらかといえば分かりやすかった」と答えた人は21名(95%)とわかりやすさについて高い評価が得られた。

以下に、参加者の感想の一部を掲載する。

- ・ 先生のご研究や関連論文からの現象学アプローチの説明がとてもわかりやすかった。
- ・ 現象学的アプローチは難しいものと考えていたが、今日の講演でもう少し身近なものと考えることができた。
- ・ 臨床からの疑問を研究につなぎ、その研究の成果を臨床に活かすという、さらなる

展開へ繋いでいく研究の在り方や研究者の態度までも分かりました。

- ・ 客観的に測定できない現象への対応について、看護実践で活かしたい。
- ・ 相手を理解することを諦めず関わる。何らかの変化に気づいてゆきたい。
- ・ 患者やその方に関わる看護師の訴えの内にあるその真意を知るために学びたい。

4) 課 題

講師の予定に合わせて開催日を決めたが、土曜日の午後の開催としたことで病院看護師には勤務後の参加という従来の参加形態を取ることができなかった為、病院看護師の参加が例年より減少したのではないかと思われた。従来通り平日夕方開催となるように調整を行った方が参加者増に結びつくと考えます。

4. 地域連携セミナー

担当：大橋麗子、江啓発

「地域連携セミナー」は、市民の皆様と保健医療福祉関連職種が連携して取り組むべき社会的な問題を取り上げ開催している。さまざまな立場の人が同じテーマについて考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待する事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
9月	テーマ及び講師の検討
10月	テーマ及び講師の決定 講演内容、日程等を講師と交渉
11月	チラシ（案）の作成と検討 会場の決定 チラシ送付先の検討 知の広場掲載依頼
12月	チラシ（案）の作成と検討 チラシ送付先の検討
1月	広報なごや4月号への掲載依頼
3月	チラシ原稿最終確認、印刷依頼（1,100部）
4月	企画広報課へのプレスリリース依頼 チラシ発送 看護実践研究センターホームページで募集告知 参加者募集開始（インターネット、メール、往復はがき） 参加申込者への参加の可否連絡
5月	講師へ当日資料等の最終連絡
6月	準備状況、参加申し込み状況の報告
7月	事前受付リスト作成開始 領収書発行の依頼 配布資料とアンケートの印刷

2) 事業の実施予定内容

テーマ：認知症のとらえ方を皆で変えよう！

人生100年時代の認知症予防と認知症ケア

講師：井上高博氏（名古屋市立大学大学院看護学研究科 准教授）

小山晶子氏（名古屋市立大学大学院看護学研究科 准教授）

日時：2023年7月29日（土）13時00分～15時00分

場 所：名古屋市立大学看護学部棟 308 講義室

参加費：500 円

参加者：93 名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

「認知症のとらえ方を皆で変えよう！人生 100 年時代の認知症予防と認知症ケア」をテーマとした講演を開催した。井上氏からは、認知症予防について最新の研究動向を踏まえ、日常生活ですぐに実践できる認知症予防の具体的方法についてご講演いただいた。小山氏からは、認知症初期集中支援チームでの活動から、認知症になると生活にどのような変化があるのか、自分らしく生活するためにはどのような工夫ができるのかについてご講演いただいた。新たな視点で認知症を理解することができた。

3) 参加者アンケート結果

参加者 86 名のうち、78 名から回答があった（回収率 90.7%）。参加者は、一般の方が 47 名（60.3%）、医療・福祉職が 31 名（39.7%）であった。一般の方では無職 22 名（28.2%）、医療・福祉職では看護職 23 名（29.5%）が最も多く、その他にはケアマネジャー、社会福祉士、ヘルパーが参加した。参加動機は「興味関心があった」40 人（51.3%）が最も多く、次に「新しい知識を得る」30 名（38.5%）であった。

以下に参加者の感想の一部を記す。

- ・ 予防と実際になった時の両面で新たな知識を得ることができた。
- ・ 他人事ではないので、当人の立場になって考えることの大切さをあらためて感じました。
- ・ 実体験に基づいたお話から、イライラから少しでも気持ちを楽にすごせるヒントを頂きました。
- ・ 認知症について学びなおすことができたため、今後仕事に生かすことができる。認知症の方に対しての接し方の考え方や認識をあらためて考え直せたため、これからの自分の行動を意識していきたい。

4) 課 題

4 月に広報を開始し、5 月末には例年よりも早く定員を満たすことができた。当初は、80 名の参加受付を予定していたが、会場としては 120 名まで収容可能であったため、申込受付を 100 名まで拡大した。結果としては、6 月中旬に 100 名超の申し込みに至り、その時点で受付を終了とした。最終的には、109 名の申し込みがあった。例年になく参加者が早く順調に集まった要因として考えられるのは、「認知症」に対する市民及び専門職の関心が高いこと、講師が本学教員であり研究と実践の双方からアプローチする講演内容に魅力があること、地下鉄出入口に大きなサイズのポスターを掲示した（広報課へ依頼）ことから多くのひとの目にとまったこと等が考えられる。来年度も市民及び専門職のニーズに合わせた講演会を企画し、積極的に広報したい。

開催中に体調不良者はでなかったが、猛暑時期の開催であるため、参加者はもとより開催スタッフの健康面にも配慮した環境設定や人員配置等を検討する必要がある。

5. 看護研究サポート

担当：鏡裕行、大橋麗子、峯恵、小塚亜矢、田島英子、石川裕子、山吹美貴

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学研究科の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【2023年度看護研究サポート】前期 2件、後期 1件

時期	内容
4月	前期看護研究サポートの募集開始
5月	前期看護研究サポートの募集締め切り（5/15締め切り、2件申込） 研究チームと教員のマッチング
6月	前期看護研究サポートの開始
7月	後期看護研究サポートの実施報告書提出依頼
8月	前期看護サポート状況の中間確認の実施
9月	後期看護研究サポートの募集開始 前期看護研究サポート中間確認の結果報告 2022年度後期看護研究サポート実施報告
10月	後期看護研究サポートの募集締め切り（10/2締め切り、1件申込） 研究チームと教員のマッチング
1月	後期看護サポート状況の中間確認の実施 後期看護研究サポート中間確認の結果報告
2月	前期看護研究サポートの実施報告書提出依頼
3月	看護研究サポート実績報告書の回収とまとめ（2/29締め切り）

2) 事業の実施状況

2021年度より、看護研究サポート事業は「なごや看護学会」に引き継がれた。なごや看護学会の申し込まれた看護研究サポートのうち、申込者が非学会員の場合は、看護実践研究センター看護研究サポート担当が窓口となり、教員とのマッチング等の運営が必要となる。学会と当センターとの連携は問題なく実施できた。

前期開始の中間報告は対応を要する事案はなかった。しかし、そのうち1件は、9月以降、モチベーションの低下による音信不通が続いたとのことで、研究を完了しないままサポート終了となる見込みとなった。対策として、指導教員からは、受講者に定期的な進捗状況の報告を課すことの提案があった。

昨年度後期開始の2件のうち1件は、サポートを継続することとなった。

3) 課 題

担当教員より、研究者が体調不良にて研究をお休みするにあたり、体調が回復されたら残りの時間を指導したいとの申し出があった。残りの時間は次年度に繰り越せないことになっているが、このような止むを得ない事情の場合は、学則における休学と同様の考え方から、委員会で協議して適宜柔軟な対応が必要と考えられる。

6. 昭和生涯学習センター共催講座

担当：小山晶子、井上高博

「昭和生涯学習センター共催講座」は、昭和区との共催で行っている事業であり、本年度で9回目である。市民は大学という普段入ることの出来ない場で、専門的で先進的なことを低額で学ぶことができ、大学としては、学生以外にも学びを提供するという地域貢献ができる事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内容
4月	昭和生涯学習センター担当者と講座開催方法の検討 (実務は名古屋市教育委員会 生涯学習課が担当) 企画テーマと講師案の検討
5月	会場の予約と会場下見・打ち合わせの日程調整 昭和生涯学習センター担当者へテーマ・講師案について相談・意見を依頼 講師との交渉開始(メール・電話で検討) 講座のねらい、コマタイトル・コマ毎のねらいを整備 テーマ、講師、開催日時の決定 知の広場掲載依頼
6月	名古屋市へ企画表を提出(昭和生涯学習センター担当者)
7月	企画表(昭和生涯学習センター担当者)を受け取り
8月	広報、参加者募集開始(昭和生涯学習センター担当者) 講座案内のチラシデータ(昭和生涯学習センター担当)を受け取り
10月	講師への依頼書発送(昭和生涯学習センター担当者)
12月	会場の臨場確認(昭和生涯学習センター担当者と共に使用教室等)
1月	講座の運営開始(1/19, 1/26, 2/2, 2/9) 第1回公開講座アンケート集計の確認・講師フィードバック確認
2月	第2-4回アンケート結果確認・講師フィードバック確認
3月	次年度以降の運営方法案提示(3/19 会議) 看護実践研究センターホームページに開催報告掲載 全学ホームページに開催報告掲載

2) 事業の実施内容

令和5年度後期昭和生涯学習センター事業として、「認知症になっても住み慣れた地域で暮らし続けるために」をテーマとする全4回の講座を実施した。第1回は公開講座であり、参加者は48名であった。第2回～4回目は現地学習(受講料:900円)で、定員50名のところ50名の応募があったが、都合が合わず辞退者があり、受講者は44名となった。



開催日時	内容	講師
1月19日 14:00-16:00	認知症ってどんな病気？	平田弘美（名古屋市立大学大学院看護学研究科・教授）
1月26日 14:00-16:00	認知症予防への第一歩、意外と知らない血圧のこと	横井靖子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・講師）
2月2日 14:00-16:00	どうすればいい？服薬管理	小山晶子（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）
2月9日 14:00-16:00	介護相談窓口のケアマネジャーとは？	井上高博（名古屋市立大学大学院看護学研究科・准教授）

3) 参加者アンケート結果

主催者である昭和生涯学習センターが実施した参加者アンケートの主な結果は、以下の通りであった。

第1回目の公開講座は、受講者48名にアンケート用紙を配布し、47名から回答があった（回収率98%）。講座の内容は、「たいへんよかった」「まあまあよかった」と答えた人が42名（89.4%）、講座の満足度は、「たいへん満足」「ほぼ満足」と答えた人が38名（81.0%）であった。以下、受講者の感想・意見（一部）を掲載する。

- ・認知症がどのようなものかの入り口に入った感じ。ならないようにどうしたら良いのかを勉強していきたいと思う。
- ・先生が明るい話し方をされていたので、暗くならずによかった。
- ・自分の状況を客観的に見ることができた。

第2～4回目の現地学習は、第4回目の受講者32名にアンケート用紙を配布し、32名から回答があった（回収率100%）。講座の内容は、「たいへんよかった」「まあまあよかった」と答えた人が31名（96.9%）、講座の満足度は、「たいへん満足」「ほぼ満足」と答えた人が30名（93.8%）であった。以下、受講者の感想・意見（一部）を掲載する。

- ・予防の観点や、服薬管理の仕方を教えてもらいタメになった。
- ・生活を見直すために大変よかった。
- ・支援を受けるまでの流れが良く分かった。

4) 課 題

昨年度に引き続き、教育委員会、昭和生涯学習センター、看護学研究科担当者の役割を一覧にし、5月に確認した。加えて担当者間で密な連絡を行い、円滑に運営できた。

学内の工事に伴い、西棟2階の会場（講義室A）までの案内に人員を要した。第1回目の公開講座の際は、昭和生涯学習センターより4名のスタッフ、学内より担当教員1名、事務1名にて誘導、運営を行った。その結果、受講者をスムーズに会場まで案内できた。

西棟講義室Aでの開催に伴い、開催前には和式トイレに関する懸念があった。担当者が事前に西棟3階のトイレが使用可能であることを確認し、当日洋式トイレを希望された方に案内した。多くの受講者は例年同じ会場であることから、不満等は聞かれなかった。

講義内容に関して、一部の受講者より、「思っていた内容と異なる」というご意見をいただいた。認知症は、予防、治療、発症後の生活などその範囲は広い。来年度は、受講者がどのような内容なのか事前に理解できるよう、講座案内の説明を留意する必要がある。

Ⅲ 今後の課題

名古屋市立大学学部の定員増にともない看護学部教員数も増え、また、名市大の附属病院群も増え、変化に対応しつつ、今後の方向性を探りながらの1年となりました。令和4年度に、看護地域連携センターと看護研究推進センターのセンターに分かれ、事業の充実、発展することが決まりましたが、令和5年度中に、両センター長の着任には至らず、従来通りのプログラムを行いつつ、今後の活動や求められるプログラムをメンバーで探りながら運営を進めてまいりました。

臨床家による看護職を対象としたなごや看護実践セミナーについては、昨年より参加者も増加し、多くの講座で好評を得ました。ロコミで参加者が増えることや、訪問看護の実践者に継続教育の講座受講のニーズが高いことも示されました。

病院の看護師への看護研究に関する研修や個別サポートは、利用者が伸び悩んでおります。病院の臨床現場では、新型コロナウイルス感染症の対応、人員配置、新人教育の点からもこれまでにない課題をつきつけられ、看護研究に時間を割くことが難しい実態もあるかと思えます。附属病院の看護部に対して、どのような学習ニーズがあるか、看護研究について名市大看護学研究科に期待するプログラムやかかわりを尋ねるアンケートを実施したところ、病院側も看護研究にとりくむ重要性の認識はあるが、職員の研究に対する知識やモチベーションも様々であり、スタッフの研究力強化には苦慮していることが示されました。本学教員には継続したサポートや研修のニーズが高いことなどが示されました。この結果をもとに、看護研究推進センター、看護地域連携センターが新たな企画を打ち立てていくことが望まれます。

地域住民を対象とした活動は、いずれも盛況であり、高齢化社会、地域住民のニーズが的確に捉えられた事業であったと考えます。事業数は少ないため、次年度以降、看護地域連携センターにおいてさらに事業数を増やし、地域住民の皆様の期待に応えられるよう、さらに充実させていくことが必要と考えます。

新型コロナウイルス感染症を経て、誰でもオンライン放映やオンデマンド配信でのセミナーや講演会が日常的なものとなりました。時間が有効活用でき、近隣の人だけでなく、県外は勿論、日本全国の皆さんを対象として事業を展開できるところは、オンライン放映やオンデマンド配信の魅力だと思います。それぞれの開催方法のメリット・デメリットを踏まえ、各々の事業にとって適切な開催方法を見極めていくことができれば、参加者数の増加も期待できると考えております。

今後は、看護地域連携センターと看護研究推進センターが地域貢献を推進する重要な役割を担います。地域社会の発展に貢献できるよう努力して参ります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

令和5年度看護地域連携センター運営委員会

センター長	金子 典代 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
運営委員	安東由佳子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	石川 裕子 (名古屋市立大学医学部附属みどり市民病院看護部)
	井上 高博 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	大橋 麗子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	鏡 裕行 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	江 啓発 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	瀬瀬万知代 (名古屋市立大学医学部附属みらい光生病院看護部)
	小塚 亜矢 (名古屋市立大学医学部附属東部医療センター看護部)
	小山 晶子 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	田島 英子 (名古屋市立大学医学部附属西部医療センター看護部)
	中村 美鈴 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	峯 惠 (名古屋市立大学病院看護部)
	宮内 義明 (名古屋市立大学大学院看護学研究科)
	山吹 美貴 (名古屋市立大学病院看護部)
事務職員	小林真理子

名古屋市立大学看護地域連携センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL&FAX 052(853)8042

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>